

論文

中国語を母語とする日本語学習者による 発音学習方略—日本語専攻1年次大学 生を対象に—

王睿来・林良子・林萍萍・高墁菲・冉露芸・程莉

要旨：

本研究では、中国の大学で日本語を専攻する大学生を対象に、どのような発音学習方略が使用されているかについて調査を行った。その結果、6つの方略カテゴリー（記憶方略、認知方略、補償方略、メタ認知方略、情意方略、社会的方略）のうち、情意方略とメタ認知方略の使用が比較的多い一方で、社会的方略の使用は少ないことが明らかになった。さらに、学習者の多くが使用する方略が9項目と限定的であることも確認された。これらの結果から、日本語教育現場においては、多様な発音学習方略、特に社会的方略の使用を促す必要があることが示唆された。

キーワード：学習方略、発音習得、発音指導、日本語教育

Abstract:

This study investigated what pronunciation learning strategies are used by university students majoring in Japanese at Chinese universities. Results indicated that affective and metacognitive strategies were used relatively frequently among the six strategy categories, social strategies were underutilized. Furthermore, it was confirmed that the number of strategies used by most learners was limited to nine strategies. These results suggest that it is necessary to promote broader strategy adoption,

particularly social strategies, in Japanese language instruction.

Keywords: learning strategies, acquisition of pronunciation,
pronunciation instruction, Japanese language teaching

1. はじめに

日本語学習者の中には、自然な発音で話したいという学習者が多い(戸田 2008; 日本語教育学会 1991)。しかし、「限られた授業時間の中で、発音にまで手が回らない」(戸田 2008, p.23)という日本語教師によるコメントがしばしば聞かれる。このような現状の中で、自然な日本語音声を身につけるためには、学習者は教室内の発音指導を受けるだけでは十分ではなく、教室外でも様々な学習方略を駆使して、自律的に発音知識を学んだり、発音練習をしたりすることが必要となる。しかし、日本語学習者がどのような発音学習方略を使用するのかに関する研究は少なく、不明な部分が多い。そのため、本研究では中国の日本語専攻大学生を対象として、その発音学習方略の使用実態について調査する。

2. 先行研究

2.1 言語学習方略と発音学習方略

言語学習方略の定義については、これまで多くの提案がなされてきた。Griffiths (2008) では、「学習者が自分の言語学習を調整するために、意識的に選択したアクティビティーのことである」(p.87) と定義されている。この定義は最もシンプルな定義の1つで、言語学習方略の本質を扱っていると評価されている(Griffiths & Oxford 2014)。

しかし、発音学習方略に関する研究は限られており、その定義の検討も少ない(Szyszka 2017)。Pawlak (2010) は、発音学習方略を「学習者が

発音の様々な側面を体系的に習得するため、論理的な手順に基づいて意識的・計画的に用いる学習方法や思考のことである」(p.191)と定義している。この定義は発音学習方略という概念の重要な側面に焦点を当てている(Pawlak & Szyszka 2018)。

2.2 中国の日本語学習者による発音学習方略使用

中国の日本語学習者による発音学習方略の使用に関する先行研究としては、馬・鮮于(2023)や呉・磯村・波多野ほか(2016)が挙げられる。

馬・鮮于(2023)は、中国語を母語とする上級日本語学習者(N1合格者)14名を対象として、発音学習方略の使用に関するアンケート調査と自由発話のデータ収集を実施した。そして、発音学習方略の使用と学習者の発音に対する日本語母語話者の評価得点との関係について検討した結果、「自分の発音をいつも意識して発音している」や「自分の発音の弱点をいつも意識している」、「自分が前よりどのくらい発音がうまくなったか確認する」、「自分で何度も繰り返し発音する」といった方略の使用と日本語母語話者の発音評価得点との間に正の相関があることが明らかとなった。この研究では、中国語を母語とする日本語学習者の発音学習方略の使用について調査したものの、その使用にはどのような特徴があるか、どの方略が学習者の多くに使用されるか等については詳しく分析されていない。

呉・磯村・波多野ほか(2016)では、中国語を母語とする日本語学習者による発音学習方略の使用と語アクセント・拍の産出能力との関係について検討している。調査協力者は北京市内にある2大学の日本語専攻学生(1年～4年)計123名であった。発音学習方略調査の結果に対して因子分析を行ったところ、「発声による練習型方略」、「人的リソース型方略」、「メディア利用型方略」、「口意識型方略」、「自己モニター型方略」という5つの因子が抽出された。また、発音学習方略の使用が語アクセント・拍の産出能力をどの程度予測するかについても検討された。その結果、すべての方略は語アクセントと拍の産出能力を有意に予測しないことが分かった。この研究では、学習者が使用する発音学習方略について5因子が抽出されたものの、その使用の実態については、馬・鮮于(2023)と同様、詳しく

分析されていない。

以上の先行研究から、中国語を母語とする日本語学習者による発音学習方略の使用について調査した研究があるものの、その使用の実態については詳しく検討されていないことがうかがえる。そこで、本研究では中国の日本語専攻大学生を対象に、発音学習方略の使用についてアンケート調査を実施し、その実態についてより詳細に分析した。

3. 方法

3.1 調査協力者

調査協力者(以下、協力者とする)は、中国の大学で日本語を主専攻とする1年生110名であった(男性26名、女性77名、性別非回答7名)。協力者の年齢は17歳～23歳で、平均18.9歳であった。協力者は全員大学に入学してから日本語の学習を開始し、調査時点では学習歴は平均8.2ヶ月(SD=0.94)であった。日本語レベルについては、日本語能力試験(JLPT)等の受験歴を持つ人はいなかった。日本で1ヶ月以上滞在する経歴を持つ人も、発音に特化した授業の受講経験を持つ人もいなかった。

3.2 調査内容

日本語学習者による発音学習方略について調査するために、Szyszka (2017)で使用された51個¹の方略(リッカート尺度項目)を日本語学習者に内容を修正し、中国語に翻訳して用いた。翻訳の正確性を確保するため、英語から中国語へ翻訳後にバックトランスレーションを実施した。51個の方略は、Oxford (1990/1994 宍戸・伴訳)の分類により、記憶方略²(6方略)、認知方略³(22方略)、補償方略⁴(6方略)、メタ認知方略⁵(8方略)、情意方略⁶(5方略)、社会的方略⁷(4方略)の6つのカテゴリーに分けられる。また、調査協力者の背景情報を把握するため、性別、年齢、学年、日本の滞在歴、日本語能力試験の受験歴等の項目も設けて回答を求めた。

3.3 調査方法

協力者に中国のオンライン調査専門サイトである問巻星⁸にアクセスし、アンケート調査の回答を求めた。協力者には51個の方略について、5件法(「1. まったく当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらともいえない」、「4. 当てはまる」、「5. 常に当てはまる」)で回答してもらった。

4. 結果

以下、51個の方略をSzyszka (2017)の6つのカテゴリーに準じ、発音学習方略使用のカテゴリー間の比較と、発音学習方略使用のカテゴリー内の分析という順に、結果を示す。

4.1 発音学習方略使用のカテゴリー間比較

分析する際に、学習者が「1. まったく当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらともいえない」、「4. 当てはまる」、「5. 常に当てはまる」を選択した場合、それぞれ1点～5点を付与した。また、6つの発音学習方略のカテゴリーのCronbach's α 係数を、JASP⁹を用いて計算した。その結果、記憶方略0.679、認知方略0.921、補償方略0.829、メタ認知方略0.884、情意方略0.817、社会的方略0.805となった。そして、6つのカテゴリーの発音学習方略使用の得点に差があるかについて検討するため、フリードマン検定を行った(Kanda (2013)のフリー統計ソフトEZRを使用)。その結果、有意差が見られた($\chi^2(5)=97.4, p<.01$)。さらに、ボンフェローニの補正を伴ったウィルコクソンの符号付順位和検定を使用して多重比較を行ったところ、情意方略の得点は補償方略、記憶方略、認知方略と社会的方略よりも有意に高かった(図1を参照)。メタ認知方略の得点は、認知方略と社会的方略よりも有意に高かった。社会的方略の得点は、ほかのいずれの方略よりも有意に低かったが、補償方略、記憶方略、認知方略の3者の間には有意差がなかった。以上の結果から、情意方略とメタ認知方略が学習者に比較的多く使用されるのに対して、社会的方略の使用は相

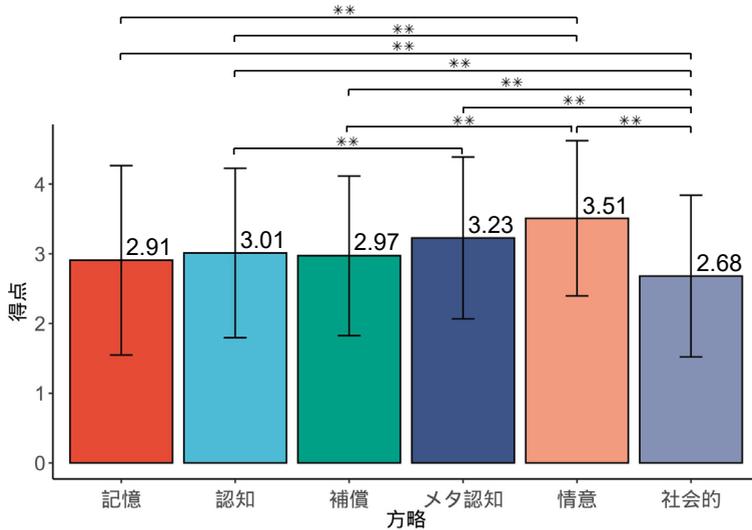


図1 発音学習方略のカテゴリーの得点 (** は $p < .01$)

対的に少ないことが分かった。全体的にどのカテゴリーの得点の平均値¹⁰も5点満点中2.68～3.51(図1を参照)ということから、いずれのカテゴリーも積極的に使用されているとはいいがたい。

4.2 発音学習方略使用のカテゴリー内の分析

発音学習方略使用のカテゴリー内の分析を行う際に、「5.常に当てはまる」と「4.当てはまる」を「使用」、「3.どちらともいえない」を「中立」、「2.当てはまらない」と「1.まったく当てはまらない」を「不使用」と見なして統合し、人数と割合を算出した。そして、51個の方略それぞれについて、使用する人数・中立の人数・不使用の人数を比較するために、適合度検定を行い、有意差があった場合には多重比較を行った(ともにjsSTAR¹¹を使用)。以下、記憶方略(表1)、認知方略(表2)、補償方略(表3)、メタ認知方略(表4)、情意方略(表5)と社会的方略(表6)の順に結果を示す。

表1は「記憶方略」(6方略)に関する「使用」、「中立」、「不使用」の学

習者の割合の比較結果である。表中の「使用」「中立」「不使用」の列については、上段の数字は人数、下段の数字は割合をそれぞれ意味する。「使用・中立・不使用の比較」欄の数字「①」～「③」は①が使用する学習者、②が中立の学習者、③が不使用の学習者の割合をそれぞれ意味する。表中の「*」は5%水準で、「**」は1%水準で有意差があることを示す。これらについては、表2～表7の記号も同様である。

表1から、記憶方略において、学習者の多くが使用する方略¹²は、「4. 日本語の発音を中国語の発音と関連付ける」であることが分かる。この結果から、学習者が積極的に使用する記憶方略は少ないことが分かる。

表1 記憶方略の使用

| 方略 | 使用 | 中立 | 不使用 | 使用・中立・不使用の比較 | | |
|--------------------------------------|--------|--------|--------|--------------|----------|----------|
| 1. 日本語の単語の発音を覚えるために、音声記号や自分なりの記号を使う。 | 21 | 22 | 67 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ ** |
| | (19.1) | (20.0) | (60.9) | | | |
| 2. 単語の発音を覚えるために、歌やライム(ラップ)を作る。 | 8 | 10 | 92 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ ** |
| | (7.3) | (9.1) | (83.6) | | | |
| 3. 発音分からない単語を、すでに知っている単語と関連付ける。 | 47 | 36 | 27 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (42.7) | (32.8) | (24.5) | | | |
| 4. 日本語の発音を中国語の発音と関連付ける。 | 76 | 24 | 10 | ① > ② ** | ① > ③ ** | ② > ③ * |
| | (69.1) | (21.8) | (9.1) | | | |
| 5. 先生がどのように単語を発音したか思い出そうとする。 | 39 | 38 | 33 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (35.5) | (34.5) | (30.0) | | | |
| 6. 発音が難しい単語は何度もリピートする。 | 50 | 37 | 23 | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| | (45.5) | (33.6) | (20.9) | | | |

数字「①」～「③」は使用する学習者、中立の学習者と不使用の学習者の割合を示す。「*」は5%水準で、「**」は1%水準で、有意差があることを示す。

表2は「認知方略」(22方略)の使用に関する比較結果を示している。表2から、学習者の多くが使用する認知方略として、22方略中、「10. 声に出さずに、発音をリピートする」、「21. テープやテレビ、映画、音楽を日本語で聞く」と「22. 話す際、発音に細心の注意を払う」の3つであった。記憶方略と同様、学習者が積極的に使用する認知方略の使用も少ない。

表3は「補償方略」(6方略)の使用に関する結果を示したものである。この表から、学習者が多く使用する補償方略は特に無いことがうかがえる。つまり、学習者は積極的に補償方略を使用せず、うまく発音できないものがある場合でも、足りない発音能力を補おうとしない、または補うことができないということが推察される。

表4は「メタ認知方略」(8方略)の使用に関する結果である。この表から、学習者が多く使用するメタ認知方略は「37.モデル音声の日本語の発音を身につけようとする」、「40.日本語の音をよく覚えようとする」と「42.プレゼンテーションの準備をする際、自分にとって発音が難しい単語をメモしておく」の3つであることが見て取れる。8方略中3方略ということで、学習者はメタ認知方略を相対的に多く使用するということと言える。

表2 認知方略の使用

| 方略 | 使用 | 中立 | 不使用 | 使用・中立・不使用の比較 | | |
|---|--------------|--------------|--------------|--------------|----------|---------|
| 7. 日本語母語話者か先生の発音をまねる。 | 49 (44.6) | 38 (34.5) | 23 (20.9) | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| 8. 先生の後について、声に出して発音をリピートする。 | 42 (38.1) | 39 (35.5) | 29 (26.4) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| 9. テープやテレビ、映画や電子辞書の後について、声に出して発音をリピートする。 | 29 (26.4) | 39 (35.5) | 42 (38.1) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| 10. 声に出さずに、発音をリピートする。 | 60 (54.5) | 33 (30.0) | 17 (15.5) | ① > ② ** | ① > ③ ** | ② > ③ * |
| 11. 声に出して、独り言のように練習する。 | 31 (28.2) | 35 (31.8) | 44 (40.0) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| 12. あまり声を出さずに独り言のように練習する。 | 52 (47.3) | 37 (33.6) | 21 (19.1) | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| 13. 単語や文章を声に出して読み上げる。 | 46 (41.8) | 35 (31.8) | 29 (26.4) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| 14. 日本語の発音を身につけるために、練習を行う。 | 27 (24.5) | 45 (40.9) | 38 (34.6) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| 15. 発音を単独で(その音だけ)練習してから、コンテキスト(単語または文)に入れて練習する。 | 47 (42.7) | 32 (29.1) | 31 (28.2) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |

| | | | | | | |
|---|--------|--------|--------|----------|----------|----------|
| 16. 他の中国人日本語学習者の発音の違いを発見する。 | 38 | 22 | 50 | ① = ② | ① = ③ | ② < ③ ** |
| | (34.5) | (20.0) | (45.5) | | | |
| 17. 口や唇の動きに注意深く観察する。 | 12 | 24 | 74 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ ** |
| | (10.9) | (21.8) | (67.3) | | | |
| 18. リスニングをする際、発音を注意深く聞く。 | 40 | 36 | 34 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (36.4) | (32.7) | (30.9) | | | |
| 19. 発音のルールについて、仮説を立てて検証する。 | 21 | 32 | 57 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ * |
| | (19.1) | (29.1) | (51.8) | | | |
| 20. 先生の口の動きをまねてみる。 | 28 | 33 | 49 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (25.5) | (30.0) | (44.5) | | | |
| 21. テープやテレビ、映画、音楽を日本語で聞く。 | 64 | 25 | 21 | ① > ② ** | ① > ③ ** | ② = ③ |
| | (58.2) | (22.7) | (19.1) | | | |
| 22. 話す際、発音に細心の注意を払う。 | 56 | 33 | 21 | ① > ② * | ① > ③ ** | ② = ③ |
| | (50.9) | (30.0) | (19.1) | | | |
| 23. 正しく発音するためにゆっくり話すようにする。 | 44 | 41 | 25 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (40.0) | (37.3) | (22.7) | | | |
| 24. 自分の声を録音して、発音を確認する。 | 20 | 34 | 56 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ * |
| | (18.2) | (30.9) | (50.9) | | | |
| 25. 日本語の異なるアクセントや方言に注意を払う。 | 15 | 24 | 71 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ ** |
| | (13.6) | (21.9) | (64.5) | | | |
| 26. 単語の発音は、ゆっくり練習してから、スピードアップして練習する。 | 40 | 32 | 38 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (36.4) | (29.1) | (34.5) | | | |
| 27. 中国語と日本語の発音の違いに注目する(例：中国語の「e」日本語の「え」)。 | 41 | 39 | 30 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (37.3) | (35.5) | (27.2) | | | |
| 28. 発話する前に日本語で何というか、頭の中でリハーサルしておく。 | 48 | 37 | 25 | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| | (43.6) | (33.6) | (22.8) | | | |

数字「①」～「③」は使用する学習者、中立の学習者と不使用する学習者の割合を示す。「*」は5%水準で、「**」は1%水準で、有意差があることを示す。

表3 補償方略の使用

| 方略 | 使用 | 中立 | 不使用 | 使用・中立・不使用の比較 | | |
|---|--------|--------|--------|--------------|-------|-------|
| 29. 自分にとって発音が難しい単語を言うのを避ける。 | 34 | 36 | 40 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (30.9) | (32.7) | (36.4) | | | |
| 30. 自分の発音で単語の意味が伝わりにくいと思った時、身振りやジェスチャー等を使う。 | 34 | 41 | 35 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (30.9) | (37.3) | (31.8) | | | |

| | | | | | | |
|--|--------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 31. 自分にとって発音が難しい単語のかわりに、別の同じ意味の語を使う。 | 39 | 39 | 32 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (35.5) | (35.5) | (29.0) | | | |
| 32. 単語の発音が分からない際、多くの単語を使って、言い換えるようにする。 | 43 | 37 | 30 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (39.1) | (33.6) | (27.3) | | | |
| 33. 電子辞書やマルチメディア辞書で単語の発音を聞いて自分の発音を直す。 | 43 | 36 | 31 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (39.1) | (32.7) | (28.2) | | | |
| 34. 自分にとって発音が難しい単語を人に発音してもらう。 | 34 | 35 | 41 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (30.9) | (31.8) | (37.3) | | | |

数字「①」～「③」は使用する学習者、中立の学習者と不使用の学習者の割合を示す。

表4 メタ認知方略の使用

| 方略 | 使用 | 中立 | 不使用 | 使用・中立・不使用の比較 | | |
|---|--------|--------|--------|--------------|----------|----------|
| 35. 日本語音声学について学ぼうとする。 | 47 | 35 | 28 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (42.7) | (31.8) | (25.5) | | | |
| 36. 発音ルールに関する資料を読む。 | 23 | 29 | 58 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ ** |
| | (20.9) | (26.4) | (52.7) | | | |
| 37. モデル音声の日本語の発音を身につけようとする。 | 63 | 35 | 12 | ① > ② ** | ① > ③ ** | ② > ③ ** |
| | (57.3) | (31.8) | (10.9) | | | |
| 38. 特定の音に意識的に聞く。 | 51 | 35 | 24 | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| | (46.4) | (31.8) | (21.8) | | | |
| 39. 特定の日本語の音を意識的に学ぶ。 | 52 | 33 | 25 | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| | (47.3) | (30.0) | (22.7) | | | |
| 40. 日本語の音をよく覚えようとする。 | 61 | 37 | 12 | ① > ② * | ① > ③ ** | ② > ③ ** |
| | (55.5) | (33.6) | (10.9) | | | |
| 41. プレゼンテーションは読むのではなく、覚えるようにする。 | 31 | 37 | 42 | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| | (28.2) | (33.6) | (38.2) | | | |
| 42. プレゼンテーションの準備をする際、自分にとって発音が難しい単語をメモしておく。 | 55 | 25 | 30 | ① > ② ** | ① > ③ ** | ② = ③ |
| | (50.0) | (22.7) | (27.3) | | | |

数字「①」～「③」は使用する学習者、中立の学習者と不使用の学習者の割合を示す。「*」は5%水準で、「**」は1%水準で、有意差があることを示す。

表5は「情意方略」(5方略)に関する比較結果を示したものである。ここからは、学習者の多くは「43. 自分の発音の間違いをポジティブに捉える」と「47. 自分の発音が人に評価されると、さらに発音に注意を払うよ

うになる」という2つの情意方略を使用することが分かる。この2つの方略を多用することから、学習者の発音学習に対する積極的な姿勢と他者からのプラスの評価を気にすることがうかがえる。

表5 情意方略の使用

| 方略 | 使用 | 中立 | 不使用 | 使用・中立・不使用の比較 | | |
|--|--------------|--------------|--------------|--------------|----------|----------|
| 43. 自分の発音の違いをポジティブに捉える。 | 68 (61.8) | 31 (28.2) | 11 (10.0) | ① > ② ** | ① > ③ ** | ② > ③ ** |
| 44. 日本語と中国語の単語を発音するのを楽しんでいる。 例：中国語の「麦当劳」と日本語の「マクドナルド」 | 50 (45.5) | 35 (31.8) | 25 (22.7) | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| 45. 「自分の発音が良くなっている」などと、前向きなことを言って自分を励ます。 | 48 (43.6) | 37 (33.6) | 25 (22.8) | ① = ② | ① > ③ ** | ② = ③ |
| 46. 発音を間違えるリスクを気にせず、単語を発音してみる。 | 53 (48.2) | 40 (36.4) | 17 (15.4) | ① = ② | ① > ③ ** | ② > ③ ** |
| 47. 自分の発音が人に評価されると、さらに発音に注意を払うようになる。 | 72 (65.5) | 27 (24.5) | 11 (10.0) | ① > ② ** | ① > ③ ** | ② > ③ * |

数字「①」～「③」は使用する学習者、中立の学習者と不使用の学習者の割合を示す。「*」は5%水準で、「**」は1%水準で、有意差があることを示す。

表6は「社会的方略」(4方略)の使用に関する結果である。補償方略と同様、学習者の多くが使用する社会的方略も特に見られないという結果となった。方略50と方略51からは、むしろ学習者が社会的方略を使用しない傾向があるのではないかと考えられる。つまり、発音学習において個人主義的な学習スタイルが強いのではないかと推測される。

表6 社会的方略の使用

| 方略 | 使用 | 中立 | 不使用 | 使用・中立・不使用の比較 | | |
|---------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------|-------|
| 48. 人に自分の発音を直してもらう。 | 34 (30.9) | 36 (32.7) | 40 (36.4) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |
| 49. 周りの人と日本語で話す。 | 34 (30.9) | 36 (32.7) | 40 (36.4) | ① = ② | ① = ③ | ② = ③ |

| | | | | | | |
|--------------------------------|--------|--------|--------|-------|----------|----------|
| 50. 人と一緒に発音を学ぶ。 | 22 | 32 | 56 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ * |
| | (20.0) | (29.1) | (50.9) | | | |
| 51. 人に日本語の発音を教えた り、手伝ったりする。 | 19 | 28 | 63 | ① = ② | ① < ③ ** | ② < ③ ** |
| | (17.3) | (25.5) | (57.2) | | | |

数字「①」～「③」は使用する学習者、中立の学習者と不使用する学習者の割合を示す。「*」は5%水準で、「**」は1%水準で、有意差があることを示す。

5. 考察

上記で得られた結果について、まとめると、まず、記憶方略、認知方略、補償方略、メタ認知方略、情意方略、社会的方略という6つのカテゴリーの発音学習方略使用の得点について比較を行ったところ、情意方略とメタ認知方略の使用は相対的に多く、社会的方略の使用は相対的に少ないことが分かった。情意方略では、「43. 自分の発音の間違いをポジティブに捉える」学習者が多い(61.8%)という結果から、学習者の多くは発音の間違いに対して、不安やスランプのようなネガティブな感情よりも、ポジティブに捉えることが分かった。ポジティブな感情は言語習得を促進し、ネガティブな感情は言語習得を阻害する場合が多いため(Li & Li 2023; 李・韓 2022)、学習者が発音の間違いに対して、ポジティブに捉えることは発音学習に極めて重要なことと言える。「47. 自分の発音が人に評価されると、さらに発音に注意を払うようになる」学習者も多かった(65.5%)。自分の発音が人に評価されることは発音学習の楽しさや達成感につながると考えられる。楽しさというポジティブな感情は第二言語の到達度と正の相関を持つため(Dewaele & Li 2022)、教師は発音指導を行う際に学習者にポジティブなフィードバックを与えたり、励ましたりすることを心掛けることが重要であろうことが示唆された。

メタ認知方略の使用については、「37. モデル音声の日本語の発音を身につけようとする」、「40. 日本語の音をよく覚えようとする」、「42. プレゼンテーションの準備をする際、自分にとって発音が難しい単語をメモしておく」という3つの方略を使用する学習者がそれぞれ、57.3%、55.5%、

50.0%と、中立と不使用の学習者よりも多かった。「37. モデル音声の日本語の発音を身につけようとする」方略から、学習者の多くは母語話者並みの発音能力を習得しようとするのがうかがえる。母語話者並みの発音能力という高い到達目標は高いモチベーションにつながり、学習にプラスの影響が多いと考えられるが、特に大人になってから第二言語学習を始めると、目標言語の母語話者と同等の発音能力を身につけることが困難であるとされる。近年「外国語訛りが無い」という完璧な発音よりも、「分かりやすい」発音を目標とするほうが妥当と提唱されてきた (Derwing & Munro 2005; Levis 2005)。もちろん、どのような発音能力を目標とするかは学習者の目的によるが、教師は学習者に合わせて柔軟に対応することが求められる。学習者の多く (55.5%) が「40. 日本語の音をよく覚えようとする」方略を使用するということについては、本研究の協力者は大学に入学してから日本語の学習を開始し、調査時点では学習歴は約 8.2 か月であったことに関連すると考えられる。日本語の入門段階では、五十音図をはじめ、特殊拍(長音、促音、撥音)やアクセント、イントネーション等、長期間にわたって発音を学習することが一般的なので、学習者は日本語の音を覚える方略が必要となるのであろう。さらに、「42. プレゼンテーションの準備をする際、自分にとって発音が難しい単語をメモしておく」という方略の使用は、自己モニターに当たる。自己モニター型の発音学習方略の使用は発音学習に効果的な影響を与えることが実証されており (小河原 1998)、「自分で自分の発音に納得するまで自分の発音を修正する」といった方略の使用を促すべきである。

一方、社会的方略の使用については、学習者の多くが使用する方略は皆無であった。しかし、「言語は社会的行動の一形式である。それはコミュニケーションであり、2 人の間で、あるいは多人数の間で行なわれるものである。言語学習は他人を巻き込むことであり、適切な社会的ストラテジーがこの過程において非常に重要である」(Oxford 1990/1994 宍戸・伴訳, p.124)。竹内 (2007) でも、社会的方略の重要性について指摘している。それと同時に、「ライバルをつくる」、「他人に監視してもらう」、「複数の学習者が集まる場を見つける」といった具体的な方略も提案してい

る。日本語教師も学習者を社会的方略の使用へ導く教育上の仕掛けを考案する必要があると考えられる。

表7 学習者に多く使用される発音学習方略

| カテゴリー | 方略 | 使用・中立・不使用の比較 | | |
|--------|---|--------------|-------|-------|
| 記憶方略 | 4. 日本語の発音を中国語の発音と関連付ける。 | ①>②** | ①>③** | ②>③* |
| 認知方略 | 10. 声に出さずに、発音をリピートする。 | ①>②** | ①>③** | ②>③* |
| | 21. テープやテレビ、映画、音楽を日本語で聞く。 | ①>②** | ①>③** | ②=③ |
| | 22. 話す際、発音に細心の注意を払う。 | ①>②* | ①>③** | ②=③ |
| 補償方略 | 該当なし | | | |
| メタ認知方略 | 37. モデル音声の日本語の発音を身につけようとする。 | ①>②** | ①>③** | ②>③** |
| | 40. 日本語の音をよく覚えようとする。 | ①>②* | ①>③** | ②>③** |
| | 42. プレゼンテーションの準備をする際、自分にとって発音が難しい単語をメモしておく。 | ①>②** | ①>③** | ②=③ |
| 情意方略 | 43. 自分の発音の間違いをポジティブに捉える。 | ①>②** | ①>③** | ②>③** |
| | 47. 自分の発音が人に評価されると、さらに発音に注意を払うようになる。 | ①>②** | ①>③** | ②>③* |
| 社会的方略 | 該当なし | | | |

数字「①」～「③」は使用する学習者、中立の学習者と不使用の学習者の割合を示す。「*」は5%水準で、「**」は1%水準で、有意差があることを示す。

次に、6つのカテゴリーについてそれぞれ分析を行ったところ、表7に示す通り、学習者の多くが使用する発音学習方略が9つしかないことが分かった。この結果から、学習者は知らない発音学習方略が多い、または知っていても積極的に使用しない発音学習方略が多いことが推測される。もし学習者が知らない方略が多ければ、教師がそれらを紹介することが

必要となる。特に、発音習得に役に立つと実証されている「自己モニター型」の方略(小河原 1998)や、他の日本語学習者の発音の間違いを発見する方略(Eckstein 2007)、「人に自分の発音を直してもらおう」という人の助けを求める方略(Eckstein 2007)等である。学習者が知っていても積極的に使用しない方略については、それらの方略は負担が大きいため使用しないのか、それとも楽しくないから使用しないのか、その原因を究明する必要がある。さらに、学習方略研究はその当初から方略指導の可能性を視野に入れた分野で(水本 2017)、これまで語彙習得をはじめとする各分野において、学習方略指導に関する実証研究が数多く行われており、その効果も確認されている(例: Mizumoto & Takeuchi 2009)。日本語教育においても発音学習方略の指導とその効果検証が求められると考えられる。具体的な指導方法としては、例えば Chamot (2009) に提案された *Cognitive Academic Language Learning Approach (CALLA)* が参考となる。指導手順としては、(1) Preparation、(2) Presentation、(3) Practice、(4) Evaluation、(5) Expansion で、この手順に基づいた発音学習方略の指導は、教育実践の面においても学術的研究の面においても興味深いものだと考えられる。

6. おわりに

発音習得のプロセスは複雑で、教師による発音指導よりも学習者自身に大きく依存すると考えられる(Jones 2002; Tominaga 2009)。そのため、学習者はどのように発音学習に取り組むのかについて明らかにすることが重要である。本研究では中国の日本語専攻大学生による発音学習方略の使用について調査を行った。その結果、記憶方略、認知方略、補償方略、メタ認知方略、情意方略、社会的方略という6つのカテゴリーの発音学習方略の中で、情意方略とメタ認知方略が多く使用され、社会的方略の使用は相対的に少ないことが分かった。また、全体的に学習者の多くが使用する方略は9つと少ないことも分かった。本研究の結果を踏まえ、日本語教師

は授業等において、発音習得に有効な方略を紹介したり、発音学習方略の指導を行ったりすることが期待される。

学習者の国籍¹³は学習方略の研究において重要な変数となる可能性があるため (Griffiths 2003)、今後は他の国の日本語学習者がどのような発音学習方略を使用するのかについても調査し、比較することは有意義であると考えられる。また、どのような要因が(例えば、学習方略の有効性・コストへの認識や学習方略自体の楽しさなど)、どのように学習者の発音学習方略の使用に影響を与えるのかについて探求することも、今後の課題として残されている。

注

- 1: Szyszka (2017) は 52 個の方略であるが、「I check the phonetic symbols of words from a dictionary when I have difficulty in pronouncing」という方略は日本語学習に合わないため、削除した結果 51 個となった。
- 2: 記憶方略は、記憶術とも呼ばれ、「知的連鎖を作る」、「イメージや音を結びつける」、「繰り返し練習する」、「動作に移す」に分類できる (Oxford 1990/1994 穴戸・伴訳, p.38)。
- 3: 認知方略は、「練習をする」、「情報内容を受け取ったり、送ったりする」、「分析したり、推論したりする」、「インプットとアウトプットのための構造を作る」とある (Oxford 1990/1994 穴戸・伴訳, p.43)。
- 4: 補償方略は、「学習者が外国語を理解したり、発話したりする際に、足りない知識を補うために使うものである」(Oxford 1990/1994 穴戸・伴訳, p.48)。
- 5: メタ認知方略は、「純粋な認知作用以外の、学習者が自己の学習過程を調整する方法を提供してくれる活動である」(Oxford 1990/1994 穴戸・伴訳, p.115)。
- 6: 情意方略は、主なものとして、「自分の不安を軽くする」、「自分を勇気づける」、「自分の感情をきちんと把握する」の三つである (Oxford 1990/1994 穴戸・伴訳, p.119)。
- 7: 社会的方略は、「質問をする」、「他の人々と協力する」、「他の人々へ感情移入をする」という三種類の方略がある (Oxford 1990/1994 穴戸・伴訳, p.124)。
- 8: 「問巻星」 <https://www.wjx.cn/> (2025 年 6 月 26 日閲覧)
- 9: JASP については、<https://jasp-stats.org/> (2025 年 6 月 26 日閲覧) を参照。

10: 本研究の調査は5段階の回答で、データの正規分布が期待できないと考えられるため、中央値を呈示するほうがふさわしいと考えられるが、どのカテゴリーの中央値も3であるため、より解釈のし易い平均値を示している。

11: 「js-STAR」は田中敏氏と中野博幸氏に作成された統計分析ソフトウェアで、詳細は<https://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/> (2025年6月26日閲覧)を参照。

12: 「学習者の多くが使用する方略」とは、①の学習者数は②と③よりも有意に多いことを意味する。

13: 原文は「nationality」とあるためここでは「国籍」と和訳した。

謝辞

本稿は、「韓山師範学院 2023 年度教授、博士啓動項目」(課題番号: QD2023219)とJSPS 科研費 21H04348 の助成を受けた研究の一部です。そして、調査に協力して下さったすべての学習者の方々に深くお礼を申し上げます。

参考文献

- 馬若君・鮮于媚 (2023) 「日本語学習者の言語学習ストラテジーと音声評価の分析: 上級レベルの中国語母語話者を対象に」『さいたま言語研究』7: pp.51-63.
- Chamot, Anna U. (2009) *The CALLA handbook: Implementing the cognitive academic language learning approach* (2nd ed.). White Plains, NY: Longman/Pearson Education.
- Derwing, Tracey M. and Munro, Murray J. (2005) Second language accent and pronunciation teaching: A research-based approach. *TESOL Quarterly*, 39: pp.379-397.
- Dewaele, Jean-Marc. and Li, Chengchen. (2022) Foreign language enjoyment and anxiety: Associations with general and domain-specific English achievement. *Chinese Journal of Applied Linguistics*, 2022(1): pp.32-48.
- Eckstein, Grant T. (2007) *A correlation of pronunciation learning strategies with spontaneous English pronunciation of adult ESL learners*. Unpublished M.A. dissertation. Brigham Young University, Provo, Utah.
- 呉麗楠・磯村一弘・波多野博顕・金村久美・松田真希子 (2016) 「JFL 環境下での発音学習ストラテジー使用と発音習得: 中国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に」『音声研究』20 (1) : pp.6-15.
- Griffiths, Carol. and Oxford, Rebecca L. (2014) The twenty-first century landscape of language learning strategies: Introduction to this special issue. *System*, 43: pp.1-10.
- Griffiths, Carol. (2003) Patterns of language learning strategy use.

- System*, 31(3): pp.367–383.
- Griffiths, Carol. (2008) Strategies and good language learners. In Griffiths C. (ed.) *Lessons from good language learners*, pp.83–98. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jones, Rodney H. (2002) Beyond ‘listen and repeat’: Pronunciation teaching materials and theories of second language acquisition. In Richards, Jack C. and Renandya, Willy A. (eds.) *Methodology language teaching: An anthology of current practice*, pp.178–187. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kanda, Yoshinobu. (2013) Investigation of the freely available easy-to-use software ‘EZR’ for medical statistics. *Bone marrow transplantation*, 48(3): pp.452–458.
- Levis, John M. (2005) Changing contexts and shifting paradigms in pronunciation teaching. *TESOL Quarterly*, 39(3): pp.369–377.
- 李成陳・韓晔 (2022) 「外語愉悦、焦慮及無聊感情對網課學習成效的預測作用」『現代外語』45 (2) : pp.207–219.
- Li, Chengchen. and Li, Wei. (2023) Anxiety, enjoyment, and boredom in language learning amongst junior secondary students in rural China: How do they contribute to L2 achievement? *Studies in Second Language Acquisition*, 45(1): pp.93–108.
- 水本篤 (2017) 「語彙学習方略：理論と実践」『KELES ジャーナル』2: pp.44–49.
- Mizumoto, Atsushi. and Takeuchi, Osamu. (2009) Examining the effectiveness of explicit instruction of vocabulary learning strategies with Japanese EFL university students. *Language Teaching Research*, 13: pp.425–449.
- 日本語教育学会編 (1991) 『日本語教育機関におけるコースデザイン』凡人社.
- 小河原義朗 (1998) 「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」『言語科学論集』2: pp.1–12.
- Oxford, Rebecca L. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbery House Publishers. (オックスフォード, L. 著, 宍戸通庸・伴紀子訳 (1994) 『言語学習ストラテジー：外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社)
- Pawlak, Mirosław. (2010) Designing and piloting a tool for the measurement of the use of pronunciation learning strategies. *Research in Language*, 8: pp.189–202.
- Pawlak, Mirosław. and Szyszka, Magdalena. (2018) Researching pronunciation learning strategies: An overview and a critical look. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 8(2): pp.293–323.
- Szyszka, Magdalena. (2017) *Pronunciation learning strategies and lan-*

- guage anxiety: In search of an interplay*. Switzerland: Springer.
- 竹内理 (2007) 『「達人」の英語学習法』草思社.
- 戸田貴子 (2008) 「第2章：日本語学習者の音声に関する問題点」 戸田貴子編 『日本語教育と音声』 pp.23-41. くろしお出版.
- Tominaga, Yuko. (2009) An analysis of successful pronunciation learners: in search of effective factors in pronunciation teaching. *Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, 13(1): pp.127-140.